

芥川龍之介

袈裟と盛遠





袈裟けさと盛遠もりと



## 上

夜、<sup>よる</sup>盛遠が築土<sup>ついで</sup>の外で、  
月魄<sup>つきしろ</sup>を眺めながら、  
落葉を踏  
んで物思いに耽<sup>ふけ</sup>っている。

## その独白

「もう月の出だな。  
何時<sup>いつ</sup>もは月が出るのを待ちかねる己<sup>おれ</sup>

も、今日ばかりは明あかるくなるのがそら恐しい。今までの己が一夜の中に失われて、明日あすからは人殺ひとごろしになり果てるのだと思うと、こうしていても、体が震えて来る。この両の手が血で赤くなった時を想像して見るが好いい。その時の己は、己自身にとって、どの位呪のろわしいものに見えるだろう。それも己の憎む相手を殺すのだったら、己は何もこんなに心苦しい思いをしなくてもすんだのだが、己は今夜、己の憎んでいない男を殺さなければならぬ。

己はあの男を以前から見知っている。  
渡わたる左衛門尉さえもんのかぶとと

云う名は、今度の事に就いて知ったのだが、男にしては柔  
 しすぎる、色の白い顔を見覚えたのは、何時の事だかわ  
 からない。それが袈裟けさの夫だと云う事を知った時、己が  
 一時嫉妬しつとを感じたのは事実だった。しかしその嫉妬も、  
 今では己の心の上に何一つ痕跡こんせきを残さないで、綺麗きれいに消  
 え失せてしまっている。だから渡は己にとって、恋の仇かたき  
 とは云いながら、憎くもなければ、恨めしくもない。い  
 や、寧むしろ、己はあの男に同情していると云っても、よい  
 位だ。衣川ころもがわの口から渡が袈裟を得る為に、どれだけ心  
 を労したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛かわゆく思った

事さえある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云う事ではないか。己はあの生真面目きまじめな侍の作った恋歌れんかを想像すると、知らず識らずし微笑が唇くちびるに浮んで来る。しかしそれは何も、渡を嘲あざける微笑ではない。己はそうまでして、女に媚こびるあの男をいじらしく思うのだ。或は己の愛している女に、それ程までに媚びようとするあの男の熱情が、愛人たる己に或種の満足を与えてくれるからかも知れない。

しかしそう云える程、己は袈裟を愛しているだろうか。己と袈裟との間の恋愛は、今と昔との二つの時期に別れ



ている。己は袈裟がまだ渡に縁づかない以前に、既に袈裟を愛していた。或は愛していると思っていた。が、これも今になって考えると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたのか、童貞だった頃の己は、あきらか明に袈裟の体を求めていた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に対する愛なるものも、実はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかった。それが証拠には、袈裟との交渉が絶えたその後の三年間、成程己はあの女の事を忘れずにいたにちがいないが、もしその以前に己があの子の体を知っていたなら、

それでもやはり忘れずに思いつづけていたであろうか。

己は恥はずかしながら、然りと答える勇氣はない。己が袈裟

に対するその後の愛着の中には、あの女の体を知らずに

いる未練が可かなり成混っている。そうして、その悶々もんもんの情を抱いだ

きながら、己はとうとう己の恐れていた、しかも己の待

っていた、この今の関係にはいつてしまった。では今は？

己は改めて己自身に問いかけよう。己は果して袈裟を

愛しているだろうか。

が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌いやでもこう

云ういきさつを思い出す必要がある。——渡辺の橋の供

養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇あった己は、それから凡およそ半年ほんとしばかりの間、あの女と忍び合う機会を作る為に、あらゆる手段を試みた。そうしてそれに成功したばかりではない、その時、己は、己が夢みていた通り、袈裟の体を知る事が出来た。が、当時の己を支配していたものは、かならず必しも前に云った、まだあの女の体を知らないと云う未練ばかりだった訳ではない。己は衣川の家で、袈裟と一つ部屋の畳へ坐った時、既にこの未練が何時か薄くなっているのに気がついた。それは己がもう童貞でなかったと云う事も、その場になって、己の欲望を

弱める役に立ったのである。しかしそれよりも、主な原因は、あの女の容色が、衰えていると云う事だった。実際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一体に光沢つやを失って、目のまわりにはうす黒く暈かきのようなものが輪どっている。頬ほおのまわりや顚あごの下にも、以前の豊かな肉附きが、嘘うそのようになくなってしまった。僅わずかに変らないものと云っては、あの張りのある、黒瞳勝くろめがちな、水々しい目ばかりであろうか。——この変化は己の欲望にとつて、確たしかに恐しい打撃だった。己は三年ぶりで始めてあの女と向い合った時、思わず視線をそらさずには

いられなかつた程、強い衝動を感じたのを未<sup>いまだ</sup>にはつきり覚えてゐる。……

では、比較的そう云う未練を感じていない己が、どうしてあの女に関係したのであろう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向い合っていると、あの女が夫の渡に対して持っている愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしても或空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に対して虚栄心を持っている」——己はこう考えた。「或はこれも、己の憐憫<sup>れんびん</sup>を買いたくないと云う反抗心の現れかも知



情欲に支配されていた。それはあの女の体を知らないと言ふ未練ではない。もつと下等な、相手があこの女である必要のない、欲望のための欲望だ。恐らくは傀儡くぐつの女を買ふ男でも、あの時の己程は卑しくなかつた事であろう。

とにかく己はそう云ういろいな動機で、とうとう袈裟と関係した。と云うよりも袈裟を辱はずかしめた。そうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、——いや、己が袈裟を愛しているかどうかなどと云う事は、いくら己自身に対してでも、今更改めて問ふ必要はない。己は寧むしろ、時にはあの女に憎しみさえも感じている。殊ことに万事が完おわ

つてから、泣き伏しているあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥はれんちの己よりも、より破廉恥な女に見えた。乱れた髪のかかりと云い、汗ばんだ顔の化粧と云い、一つとしてあの女の心と体との醜さを示していないものはない。もしそれまでの己があんな女を愛していたとしたら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまったのだ。或は、もしそれまでの己があんな女を愛していなかったとしたら、あの日から己の心には新しい憎にくしみが生じたと云ってもまた差支さしつかえない。そうして、ああ、今夜己はその己が愛していない女の為に、己が憎んでい



ない男を殺そうと云うのではないか！

それも完まったく、誰の罪でもない。己がこの己の口で、

公然と云い出した事なのだ。「渡を殺そうではないか」

——己があの子の耳に口をつけて、ここう囁ささやいた時の事

を考えると、我ながら気が違っていたのかとさえ疑われ

る。しかし己は、そう囁いた。囁くまいと思いつながら、

歯を食いしばってまでも囁いた。己にはそれが何故囁き

たかったのか、今になって振りかえって見ると、どうし

てもよくわからない。が、もし強しいて考えれば、己はあ

の女を蔑さげすめば蔑む程、憎く思えば思う程、益々何かあ

の女に凌辱りようじよくを加えたくてたまらなくなつた。それには渡左衛門尉を、——袈裟がその愛を銜てらつていた夫を殺そうと云う位、そうしてそれをあの女に否応いやおうなく承諾させる位、目的かなに協つた事はない。そこで己は、まるで悪夢に襲われた人間のように、したくもない人殺しを、無理にあの女に勧めたのである。それでも己が渡を殺そうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後は人間の知らない力が、（天魔波旬てんまはじゆんとでも云うが好い）己の意志を誘つて、邪道へ陥おとしれたとでも解釈するより外はない。とにかく、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟

の耳に囁いた。

すると袈裟は暫くして、急に顔を上げたと思うと、素直に己の目ろみに承知すると云う返事をした。が、己にはその返事の容易だったのが、意外だったばかりではない。その袈裟の顔を見ると、今までに一度も見えなかった不思議な輝きが目に宿っている。姦婦——そう云う気が己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の眼の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫りがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでいた事は、元よりわざわざ云

う必要もない。もし出来たなら、その時に、己は己の約束をその場で破ってしまいたかった。そうして、あの不貞な女を、辱しめと云う辱しめのどん底まで、つき落してしまいたかった。そうすれば己の良心は、たとえばあの女をもてあそんだにしても、まだそう云う義憤の後に、避難する事が出来たかも知れない。が、己にはどうしても、そうする余裕が作れなかった。まるで己の心もちを見透みとおしでもしたように、急に表情を変えたあの女が、じつと己の目を見つめた時、——己は正直に白状する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結ぶような羽目に陥

ったのは、完く万一己が承知しない場合に、袈裟が己に  
 加えようとする復讐ふくしゅうの恐怖からだった。いや、今でも猶なお  
 この恐怖は、執念深く己の心を捕えている。臆病だと晒わら  
 う奴は、いくらでも晒うが好いい。それはあの時の袈裟を  
 知らないもののする事だ。「己が渡を殺さないとすれば、  
 よし袈裟自身は手を下さないにしても、必かならず、己はこの  
 女に殺されるだろう。その位なら己の方で渡を殺してし  
 まってやる」——涙がなくて泣いているあの女の目を見  
 た時に、己は絶望的にこう思った。しかもこの己の恐怖  
 は、己が誓言せいごんをした後で、袈裟が蒼白あおい顔に片かたえくぼ 靨くぼをよ

せながら、目を伏せて笑ったのを見た時に、裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪わしい約束の為に、汚れた上にも汚れた心の上へ、今又人殺しの罪を加えるのだ。もし今夜に差迫って、この約束を破ったなら——これも、やはり己には堪えられない。一つには誓言の手前もある。そうして又一つには、——己は復讐を恐れると云った。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？ この己を、この臆病な己を追いやって罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？ 己にはわか

らない。わからないが、事によると、——いやそんな事はない。己はあの女を蔑んでいる。恐れている。憎んでいる。しかしそれでも猶、己はあの女を愛しているせい  
 かも知れない」

盛遠は徘徊はいかいを続けながら、再ふたたび、口を開ひらかない。月明つきあかり。  
 どこかで今様を謡う声がする。

げに人間ぼんのうの心こそ、無明むみょうの闇やみも異ことならね、  
 ただ煩惱ぼんのうの火と燃えて、消ゆるばかりぞ命なる。

## 下

夜<sup>よる</sup>、袈裟が帳台の外で、燈台の光に背<sup>そむ</sup>きながら、袖<sup>そで</sup>を嚙<sup>か</sup>んで物思いに耽<sup>ふけ</sup>っている。

## その独白

「あの人は来るのかしら、来ないのかしら。よもや来ない事はあるまいと思うけれど、もうかれこれ月が傾くの



に、足音もしないところを見ると、急に気でも変ったではあるまいか。もしひよつとして来なかつたら——ああ、わたし私はまるで傀儡くぐつの女のようにこの恥しい顔をあげて、又日の目を見なければならぬ。そんなあつかましい、よこしま邪よこしまな事がどうして私に出来るだろう。その時の私こそ、あの路みちばたに捨ててある死体と少しも変りはない。辱はずかしめられ、踏みにじられ、揚句の果にその身の恥をのめぬめと明るみに曝さらされて、それでもやはり唾おしのように黙っていなければならぬのだから。私は万一そうになったら、たとひ死んでも死にきれない。いやいや、あの人は必かならず、

来る。私はこの間別れ際に、あの人の目を覗きこんだ時ぎわから、そう思わずにはいられなかった。あの人は私を怖こわがっている。私を憎み、私を蔑みながら、それでも猶なほ私を怖がっている。成程私が私自身を頼みにするのだったら、あの人が必、来るとは云われなだらう。が、私はあの人を頼みにしている。あの人利己心を頼みにしている。いや、利己心が起させる卑しい恐怖を頼みにしている。だから私はこう云われるのだ。あの方はきつと忍んで来るのに違いない。……

しかし私自身を頼みにする事の出来なくなつた私は、

何と云うみじめな人間だろう。三年前まえの私は、私自身を、この私の美しさを、何よりもまた頼みにしていた。三年前と云うよりも、或はあの日までと云った方が、もっとほんとうに近いかも知れない。あの日、伯母おば様の家の一間で、あの人と会った時に、私はたった一目見たばかりで、あの子の心に映っている私の醜さを知ってしまった。あの子は何事もないような顔をして、いろいろ私を唆そそのかすような、やさしい語ことばをかけてくれる。が、一度自分の醜さを知った女の心が、どうしてそんな語に慰められよう。私は唯、口惜くやしかった。恐しかった。悲しかった。

た。子供の時に乳母うばに抱かれて、月蝕げっしょくを見た気味の悪  
さも、あの時の心もちに比べれば、どの位ましだかわか  
らない。私の持っていたさまざまな夢は、一度にどこか  
へ消えてしまう。後には唯、雨のふる明け方のような寂  
しさが、じっと私の身のまわりを取り囲んでいるばかり  
——私はその寂しさに震えながら、死んだも同様なこの  
体を、とうとうあの人に任せてしまった。愛してもいな  
いあの人に、私を憎んでいる、私を蔑んでいる、色好み  
なあの人に。——私は私の醜さを見せつけられた、その  
寂しさに堪えなかつたのであろうか。そうしてあの人

胸に顔を当てて、熱に浮かされたような一瞬間にすべてを欺あざむこうとしたのであろうか。さもなければ又、あの  
人同様、私も唯汚らわしい心もちに動かされていたのであ  
らうか。そう思っただけでも、私は恥しい。恥しい。  
恥しい。殊にあの人の腕を離れて、又自由な体に帰った  
時、どんなに私は私自身を浅ましく思った事であらう。  
私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思っ  
ても、止め度なく涙が溢あふれて来た。けれども、それは何  
も、操みさおを破られたと云う事だけが悲しかった訳ではな  
い。操を破られながら、その上にも卑められていると云

う事が、丁度癩らいを病んだ犬のように、憎まれながらも虐さいなまれていると云う事が、何よりも私には苦しかった。そうしてそれから私は一体何をしていたのであろう。今になつて考えると、それも遠い昔の記憶のように朧おぼろげにしかわからない。唯、すすり上げて泣いている間に、あの人の口髭くちひげが私の耳にさわつたと思うと、熱い息と一しよに低い声で、「渡を殺そうではないか」と云う語が、囁ささやかれたのを覚えている。私はそれを聞くと同時に、未いまだに自分にもわからない、不思議に生々いきいきした心もちになつた。生々した？　もし月の光が明あかるいと云うのなら、そ

れも生々した心もちであろう。が、それはどこまでも月の光の明さとは違う、生々した心もちだった。しかし私は、やはりこの恐しい語の為に、慰められたのではなかったろうか。ああ、私は、女と云うものは、自分の夫を殺してまでも、なお猶人に愛されるのがうれ嬉しく感ぜられるものなのだろうか。

私はその月夜の明さに似た、寂しい、生々した心もちで、又暫く泣きつづけた。そうして？ そうして？ 何時いつ、私は、あの人の手引をして夫を討たせると云う約束を、結んでなどしまったのである。しかしそ

の約束を結ぶと一しよに、私は始めて夫の事を思出した。私は正直に始めてと云おう。それまでの私の心は、唯、私の事を、辱められた私の事を、一いち函ちずにじっと思っていた。それがこの時、夫の事を、あの内気な夫の事を、——いや、夫の事ではない。私に何か云う時の、微笑した夫の顔を、ありあり眼の前に思い出した。私のもくろみが、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顔を思い出した刹那せつなの事であつたらう。何故と云えば、その時に私はもう死ぬ覚悟をきめていた。そうして又きめる事の出来たのが嬉しかった。しかし泣き止んだ私が顔を上げて、あ



の人の方を眺めた時、そうしてそこに前の通り、あの人の心に映っている私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一度に消えてしまったような心もちがする。それは——私は又、乳母と見た月蝕の暗さを思い出してしまおう。それはこの嬉しさの底に隠れている、さまざまの物の怪ものけを一時いちどきに放ったようなものだった。私が夫の身代りになると云う事は、果して夫を愛しているからだろうか。いや、いや、私はそう云う都合の好い口実うしろの後で、あの人に体を任かした私の罪の償つぐないをしようとする気を持つていた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の

眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはまだ大目にも見られよう。私はもつと卑しかった。もつと、もつと醜かった。夫の身代りに立つと云う名の下で、私はあの人の憎しみに、あの人の蔑みに、そうしてあの人が私を弄もてあそんだ、その邪よこしまな情欲に、仇かたきを取ろうとしていたではないか。それが証拠には、あの人の顔を見ると、あの月の光のような、不思議な生々しさも消えてしまつて、唯、悲しい心もちばかりが、忽たちまち私の心を凍らせてしまふ。私は夫の為ために死ぬのではない。私は私の為ために死のうとする。私の心を傷きずつけられた

口惜くやしさと、私の体を汚された恨めしさと、その二つの為ために死のうとする。ああ、私は生き甲斐がいがなかったばかりではない。死に甲斐さえもなかったのだ。

しかしその死甲斐のない死に方でさえ、生きているよりは、どの位望ましいかわからない。私は悲しいの無理にほほ笑みながら、繰返してあの人と夫を殺す約束をした。感じの早いあの方は、そう云う私の語ことばから、もし万一約束を守らなかった暁には、どんなことを私がしでかすか、大方推察のついた事であろう。して見れば、誓言せいごんまでしたあの方が、忍んで来ないと云う筈はずはない。

——あれは風の音であろうか——あの日以来の苦しい  
思おもいが、今夜でやっと尽きるかと思えば、さすがに気の緩ゆる  
むような心もちもする。明日の日は、必かならず、首のない私  
の死骸しがいの上に、うすら寒い光を落すだろう。それを見た  
ら、夫は——いや、夫の事は思うまい、夫は私を愛して  
いる。けれど、私にはその愛を、どうしようかと云う力も  
ない。昔から私にはたった一人の男しか愛せなかった。  
そうしてその一人の男が、今夜私を殺しに来るのだ。こ  
の燈台の光でさえそう云う私には晴れがましい。しかも  
その恋人に、虐さいなまれ果なてている私には」

袈裟は、燈台の火を吹き消してしまおう。程なく、暗の  
中でかすかにしとみ蔀を開く音。それと共にうすい月の光が  
さす。



日本文学電子図書館

---

羅生門・鼻

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社  
昭和43年7月20日発行

---



日本文学電子図書館